

忘れ難き Bath での 1 年間

島根大学総合理工学部 物質科学科

宮路 史明

Unforgettable one year in Bath

Fumiaki Miyaji

Department of Materials Science, Faculty of Science and Engineering, Shimane University

私が留学先を選んだ Stephen Mann 教授（以下 Steve）が Bath 大学化学科（現在 Bristol 大学）に居たおかげで、1998 年 6 月からの 1 年間英国で最も美しい町といわれる Bath に滞在する幸運に恵まれた。Bath はロンドンから列車で西に約 1 時間半、四方を丘陵地で囲まれた盆地に佇む人口約 80,000 人のさほど大きくない町であるが、この町が英国で唯一 UNESCO の世界文化遺産都市に指定されているのは、Bath の名前の由来ともなった有名な古代ローマの浴場跡があるからだけではない。18 世紀に Bath が上流階級の温泉保養地として大いに栄えた時代に建てられた美しいジョージ王朝様式の建築群がほぼ完璧に当時のまま保存されているからである。Royal Crescent や Great Pulteney Street のあたりをちょっと歩いてみれば、見事に保存されている優美で端正な建物の姿に誰もが感銘を受けるに違いない。そして、どの建物も、ただ保存されているのではなく、住居、ホテルやショップとして現役で一般の人々に使われ続けているのだ。日本では考えられないことである。Bath は多くの著名な作家に愛された町でもある。英文学がお好きな方

は、オースティン、ディケンズ、フィールディング等によかりの史跡を巡るのも一興であろう。本当に偶然ではあったが、おせっかいなほど親切で自分の庭の手入れに余念がない隣人の Ms. Pickwick は、19 世紀ヴィクトリア時代の文豪ディケンズの出世作“Pickwick paper”の主人公のモデルになった人物の子孫であることが分かり、色々な話を楽しく聞かせていただいた。

Bath に住んでみると、美しい Bath の町並が今こうしてあるのも、200 年前の昔から現在に至る多くの Bath 市民の不断努力があったからこそというのがよくわかる。毎日市内のどこかで古い建物の補修が行われている。花の町といわれるだけあって、公園や広場はもちろんのこと、どここの家も手入れのよく行き届いた緑や花に彩られている。観光客が捨てていく多量のゴミは市の清掃職員が絶えず巡回して片付けている。（おかげで Bath は英国一清掃の行き届いた町として表彰を受けた。）このような Bath の町であるから、市民のこの町に対する誇りと愛着は並大抵のものではない。Bath に住み始めた頃、近所の人からはもちろんのこと、銀行員や店屋のおじさんからよく「Bath の町は気に入ったか？」と聞かれた。「もちろんだ。こんな美しい町には住んだことがない。」と私

や妻が答えると、きまって「そうだろう、そうだろう。」という返事が返ってきたものだ。

Bath の魅力はその周辺に魅力的なカントリー・サイドが多いことにもある。特に Bath の北部に広がる広大な丘陵地はコッツウォルズと呼ばれ、美しい昔ながらの小さな村々が点在している英国随一の田園地方である。私もその美しい田園風景を楽しむために何度コッツウォルズに足を運んだか分からない。特に日本でも名高いウィリアム・モリスの住んだ邸のある Kelmscot の時間が止まっているかのようなどこかで美しい風景は忘れ難い。英国には 30 分遅れは当たり前前の鉄道に代表される時代遅れで非効率なことも多いのは事実だが、古いものを大切に使い続ける英国人気質、ナショナル・トラストに代表される自然・文化財保護のための非営利団体、数多くの保存蒸気鉄道の運営に見られるような老人から子供に及ぶボランティア精神等は、日本も見習ってよいことではないか。

Bath 大学は市の中心から南東部のやや小高い丘の上に広大なキャンパスを構えている。研究関連施設よりも、芝生、池、学生のための福利厚生施設、駐車場の占めているスペースの方が大きいところが、日本の多くの大学とは違う点である。夏には池の近くの芝生に座って、池で泳ぐ鴨を眺めながらゆっくりとランチをとる人が多い。各学科にはゆったりとしたカフェテリアがあり、午前と午後の 2 回のティータイムには、皆が三々五々集まってくる。大学内にはれっきとしたパブもいくつかあり、皆で昼間からビールを飲むことも珍しくない。特に私が訪れた頃はサッカーのワールドカップがあり、大きなスクリーンのあるパブは学生（教員？）で連日大賑わいであった。

ティータイムとパブタイムは英国人の生活の重要な一部分となっており、これらを抜きにして彼らの日常生活を語ることはできない。そもそも英国の大学のティータイムやパブタイムは息抜きをするためだけの時間ではない。日本の

ような定例研究報告会がないかわりに、ティータイムやパブタイムが各人の研究上の問題点をインフォーマルに議論する格好の場となる。Steve も特別な用事がない限りは毎日必ず午前のティータイムに顔を出し、新着の雑誌を紹介したり、学生に新しいアイデアを提案したりする。Steve はバイオミメティックケミストリーのパイオニアとしてこの 10 年間に Nature や Science 誌に数多くの論文を発表しているが、これだけ世界的に有名でありながら、国内外の出張を最小限に抑え、アイデアを練ったり、学生と討論するための時間を最優先する姿勢には感服した。研究には非常に厳しい一方で、学生がちょっと良いデータやアイデアを出した時には“Fantastic!”、“Excellent!”と褒めることも忘れない。私自身、論文投稿のこともあって、帰国前は毎日のように Steve と討論した。最後に帰国の挨拶を Steve にした時、彼に「Fumi（私は英国ではこう呼ばれていた）が見つけた分子テンプレートは君の Baby のようなものだ。僕自身は、君がここでやった研究を論文として投稿した後は、関連した研究は一切やらない。君の Baby は君自身が日本で大切に育てなさい。」と言われたときは本当に嬉しかった。Steve という研究者としても人間としても素晴らしい教師に恵まれ、1 年間本当に楽しい研究生生活を送ることができた。

大学のことが出たついでに私の上の息子が通った英国の小学校（現地の公立の小学校）について触れておきたい。英国では日本より約 2 年早く 4 才の 9 月から小学校（Infants School）が始まり、それも平日は毎日 9 時から 3 時までという小さな子供にはかなりハードなフルタイムのスケジュールである。日本では幼稚園の年中組にしか行ってなかった息子は、英語という言葉のハンディもあり、当然のことながら最初の何ヶ月かはなかなかじめなかった。しかし、先生方が親切だったこと、しばしば褒めてもらい胸にキラキラ光る星のシールを貼ってもらったこと（小学校から大学に至

るまで英国の教育には生徒を褒めることにより“encourage”する伝統があるらしい。)が息子への励みになったようだ。帰国前にはかなり英語を聞いたり話したりすることができるようになっていた。日本と違うのは、公立の学校であっても学区制によって生徒が機械的に割り振られるのではなく、親が複数の学校を訪問して気に入った学校に子供を入れることができる点である。日本よりも校長(Head Teacher)の権限が強く、生徒の受入の是非、学校でのカリキュラム等重要な事柄は校長の方針によって決まる。私の息子が通った学校の校長は、自分の裁量で、私の息子も含めてメキシコやパプア・ニューギニアといった外国からの生徒を積極的に受け入れ、その国の挨拶の言葉を教室の前に貼るなどして、世界には色々な国があるのだということを体験として子供達に教えようとしていた。校長自身が生徒一人一人の名前や顔はもちろんのこと、性格まで把握しているのは英国では当然のことである。カリキュラムは子供にとって非常に楽しくかつフレキシブルなもので、校長や他の先生の発案で色々な試みがされていた。私も一度参加した「親子で参加する音楽の授業」は本当におもしろく、日本でもこんな楽しい音楽の授業をやれば、音楽嫌いになる子供もいないのと思えたほどだった。一度息

子の学校の校長先生にその教育方針について伺ったことがあるが、「教えるのではなく、子供が自分で興味を持ち、考えるようにしてやりたい。」という答が印象的だった。英国の大学が少ない研究費にもかかわらず、オリジナリティーのある良い研究をしているのは、ここらへんにも理由があるのかもしれない。最初の討論のときに Steve が私に言った「想像(imagine)することが一番大切だよ。」という言葉思い出す。

単に研究に専念するためなら、単身で留学した方が良いのかもしれない。家族、特に私のように幼い子供を2人同行すると、家探しに始まって、子供の病気、学校等のことで誰ものが多かれ少なかれ苦勞をするに違いない。しかし、家族で日本以外の国に滞在することは、その苦勞を補って余りある貴重な体験を家族全員にもたらししてくれる。間違いなくその国のこと、その国の人をより深く知ることができる。個人主義の国だけあって、一般に英国人は他人のプライベートに口を出さないが、決して他人に無関心という訳ではない。どこでも老人、障害者、乳幼児を連れた人への思いやりは徹底している。ベビーカーをバスから降ろすのに苦勞していたとき、こちらが助けてあげたいような80才くらいのおじいさんが一生懸命手を貸してく



Nicky の送別パーティーで Newcastle United のスター選手の人形を囲んで記念撮影

れたこともある。何よりも上の子が肺炎で入院した時に、研究室全員からのお見舞いとして、カードとテディ・ベアを一人の英国人学生が代表してわざわざ自宅に届けてくれた時の驚きと感激は一生忘れられないだろう。このような友

人が居る限り、機会があれば何度でも英国を訪れ、パブでビールを酌み交わしたいと思う。また、1年間住んだ家の近くの丘から Bath の美しい町並をもう一度眺めてみたいと思う。